

JIC インフォメーション

第230号 2024年7月18日
年4回 1・4・7・10月の10日発行
1部500円

発行所: JIC国際親善交流センター 発行責任者: 伏田昌義

<https://www.jic-web.co.jp>

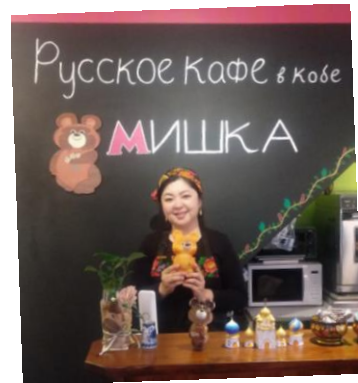
東京オフィス: 〒160-0022 東京都新宿区新宿 1-10-5 岡田ビル 6 階 TEL: 03-3355-7294 jictokyo@jic-web.co.jp

大阪・ロシア留学デスク: 〒540-0012 大阪市中央区谷町 2-2-22 NSビル 5 階 TEL: 06-6944-2341

はりねずみのジェーニャ



ロシア・旧ソ連 国際交流誌



写真は、本紙記事より抜粋

《特集》 ロシア語留学体験記

- モスクワ大学「『行きたい心』に従って」
……………東 聡海 (社会人) ……………2P
- タシュケント東洋学大学「ブレイクダンスとロシア語留学」
……………前田 修吾 (京都外国語大学) ……5P
- 大阪大学ロシアサークル「ラスヴェート」 ……杉本 苑華…8P
- 神戸のロシアカフェ「ミーシカ」 ……………榎本 真奈美…9P

増えてきた中国経由のロシア渡航……………杉浦 信也…10P

《連載》 こんな時代にロシア語のすすめ
「万雷の拍手が好きなソ連人」……………黒田 龍之助…11P

《日ロ交流情報》
ロシア文化フェスティバル、オープニングほか……………12P
JIC ロシア語講座交流会 (東京) の報告……………小原 浩子…14P

《インタビュー》 天野加代子さん
私の人生を変えてくれたロシアとの出会い……………15P

JICでは、Jクラブ(JIC友の会)会員を募集しています。
年4回の情報満載のインフォメーションをお届けします。

2020 年春から始まった新型コロナのパンデミックとそれに続くウクライナ戦争で、ロシア語を勉強しロシア語留学をめざす人にとっては「受難の日々」が続いていますが、それでも留学の道は完全に閉ざされているわけではありません。昨年秋からモスクワ大学に留学した東聡海さん、ウズベキスタン・タシュケント東洋学大学に留学した前田修吾さんから留学体験記を寄稿していただきました。また、大阪大学のロシア語サークル「ラスヴェート」の杉本苑華さんにも活動報告を書いていただきました。ロシア語留学やロシア交流に取り組む若者たちの報告記は、同じ志を持つ人たちに大きな勇気を与えてくれます。（編集部）

《ロシア・モスクワ留学記》

「行きたい」心に従って

東 聡海（社会人）

【留学を決めた理由】

「どうして今ロシアに？」

留学前、留学中、留学後に最も多く受けた質問である。私はいつもこう答える。

「今だから、行きたかった」。

戦争中の国に、それでも言語を学びに行きたいということ、さぞかし熱心な学生か、あるいは勇気のある人だと思われるかもしれない。しかし、私はどちらでもない、地方の一般企業に勤める平凡なサラリーマンだった。学生時代にソ連に興味を持ち、第二外国語でロシア語を履修したくらいである。それすら就職してからは忘れる一方だった。

2 年前に戦争が始まった時、私は信じられない思いでニュースを観ていた。ロシアがすぐに戦争を止めることを 1 年、2 年と祈り続けた。わずかとはいえ、大学時代にロシアに触れた身としては、どうしてもロシアのことを気にせずにはいられず、だんだんと「今のロシアをこの目で見たい」という気持ち募るようになった。今だからこそ、この困難な時期だからこそ、自分の目で見て、自分の頭で、ロシアのことを考えたい。

戦争が続いている以上、今後状況がよくなる保証はどこにもない。そして私自身の命や健康も、戦争が終わるまで保たれる保証だってない。この機会を逃したら、私はきっと一生後悔する。

今しかない、と腹をくくった。

2023 年の 4 月に、ロシアの首都モスクワで 9 月から翌年 2 月まで半年間留学すると決めた。

決意をしたとはいえ、不安がないわけではもちろんなかった。というか不安しかなかった。主な不安は以下の五つ。①お金について、②自分の語学力、③安全について、④友達ができるかどうか、⑤行って後悔しないか——である。

【お金について】

一点目は、お金の問題である。日本のクレジットカードは

当然使えないし、送金手段もほぼない。私はドルとユーロを半分ずつ現金で持って行ったが、道中盗まれないかとても怖かった。JIC 旅行センターの担当者から助言をいただいた送金方法で、留学中二回の送金に成功した。最初は送金が成功するかどうかわからなかったのも、お金を切り詰めて生活していた。しばらくはかなり不安で、生きた心地がしなかった。

モスクワで知り合った日本人の方によると、仮想通貨を使っている人が多いとのこと。留学する際は、①現金、②送金方法の確認、③仮想通貨について SNS などで情報を収集して行くと多少安心できると思う。JIC 旅行センターや現地の日本人の方々に、お金や生活の面で本当にたくさん助けていただいた。この場を借りて心より感謝申し上げます。

私は半年間の留学だったので断念したが、同じクラスの韓国の友達は韓国語学校でアルバイトをしていた。モスクワにはいくつか日本語学校があり、アルバイトを募集している学校もあるので、もし余裕があれば収入の一つとして働いてみるのもいいかもしれない。

【語学力について】

二点目は、「果たして本当に話せるようになるのか？」という不安である。英語圏留学に関するサイトで、よく「行ったからといって話せるようになるとは限らない」という文言を見かけていたし、私は勉強ができる方ではなかったから、授業についていけるかどうかとても不安だった。期間についても、本来のプログラムである九カ月より三カ月短い「半年」とわずかな時間だったため、正直話せるようになる自信はほとんどなかった。

結果を先に言うと、想定していたより話せるようになったし、授業についていくこともできた。授業について先に話すと、モスクワ大学の場合、最初に「学力テスト」が行われ、大体同じ学力の人たちでクラスが編成される。私のクラスはほとんどが ТРКАИ（ロシア政府のロシア語検定試験）2 レ

ベルの人たちだった。みんな同じくらいの語学力なので置いて行かれることはなく、先生もわからないところがあればわかるまで（時には時間外にも！）教えてくれた。週に 90 分×3 コマの授業が三日、90 分×2 コマが二日で、ごくたまにモスクワの街を回る課外授業があった（写真）。



授業では、教科書を使いながらとにかく「話し」た。授業の初めには先生から必ず「昨日はどんなことがあった？」と会話を振ってもらえたり、教科書にある問題は口頭での回答がメインだった。生徒同士で会話をするロールプレイもよくやった。

個人的にはこの「話す」という授業がとてもよかった。最初はロシア語を話すことが怖くて仕方がなかったのだが、授業を通して「間違えてもいいからとにかく話す」ことが身に着いた。わからなくてもいいから、まずは自分の知識を総動員して、とりあえず話す。間違えたら先生が指摘してくれるし、言い方がぎこちなければ、もっと適切な、あるいは様々な言い方を先生が教えてくれる。何より話すことで、ロシア語が頭にぱっと浮かんでくるようになった。

先生は積極的に話しかけてくれたし、熱心に話を聞いてくれた。先生が学生たちのそれぞれの国の文化について質問することも多く、「もっと話せるようになりたい」「先生やクラスメートに話を聞いてほしい」とモチベーションを高く保つこともできた。

また、モスクワ大学には複数のクラブがあり、学生であれば誰でも参加することができた。ロシアの伝統的な踊りを学ぶことができるクラブ、詩と一緒に音読するクラブ、筆記体を学習するクラブなどがあり、いずれも週に一回、一時間から 90 分ほど開かれていた。私は歌うことが好きだったので歌のクラブに参加し、ロシアの民謡やソ連時代の歌に触れることができ非常に楽しかった。ありがたいことにクラブのメンバーとは帰国後も交流が続き、大学が夏休みに入るまで、時々リモートでクラブに参加させてもらった。

【安全について】

三点目は、「安全に過ごせるだろうか？」という不安である。私が留学を決意した後、何度かモスクワにドローン攻撃

があった。ロシアでウクライナ侵攻に反対する人たちが拘束されたというニュースも何度も目にしていたし、巻き込まれる可能性は十分があると覚悟をして留学した。結果的に、留学中ほとんど身の危険を感じることはなかった。片手で数えるくらいである。夜に女性一人で出歩いている住民も多かったし、地下鉄で爆睡している人も何人か目にした。基本的に、モスクワの人たちは見知らぬ人にも優しい。階段の前で重そうな荷物を持って右往左往しているおばあちゃんがいたら、若者や男性がさっと荷物を階段上まで運ぶ。地下鉄で老人が乗ってきたら、若者がさっと席を譲る。落とし物をしたら、近くの人が「落とししましたよ」と教えてくれる。地下鉄で物乞いをしている人がいたら、多くの人が寄付をしていく。モスクワに来て驚いたことの一つは、このような「助け合うのは当然」という空気感があったことである。

もちろん、日本のように治安がいいと言われるそうではない。韓国出身の友達は夜にバーで変な男性に絡まれたというし、ロシアの友人たちによると痴漢も多いとのこと。日本人の友人たちの中には寮内で盗難にあった、警察官に職質されたなどの経験をしている人もいる。ドローン攻撃に関しては、私が留学している間には一度もなかった。ナワリヌィ氏が獄中で亡くなった時期は警察が普段よりも多いように感じたが、特に大きな事件は起きず、無事留学生生活を終了することができた。

私が身の危険を感じたのは思い出す限り二回。一度目は劇場で隣に座った人から痴漢された時、二度目は着物を着て街を歩いている時に差別的な言葉を浴びせられた時である。ちなみに一度目の痴漢については、先生が付き添ってくれたので、警察に被害届を出すことができた。ただ、警察はこのように件に関しては被害届を受理するだけして捜査しないことがほとんどらしく、私の件に関しても結局犯人は捕まっていない。

人通りの少ないところはなるべく複数人で行動すること、劇場に行く時はロシア出身の友人と行き、何かあった時のために少しの食べ物と飲み物を持って行くことをお勧めしたい。

【友達はあるか？】

四点目は、「友達はあるのだろうか？」という不安である。私が留学した際、一緒にモスクワ大学に入学した日本人はたった一人。卒業以来ロシアと接点が全くなかった私は当然モスクワに知人がいるはずもなく、へたしたら半年間一人ぼっちの可能性があるのでないかと真剣に危惧していた。

クラスメートはコース修了や入学で入れ替わりがあるものの、おおむね 7~8 人で、先生が会話を促したり、課外授業と一緒に観光地を回ったりしたこともあって全員と仲良くなることができた。授業外も、互いに誘い合って動物園に行ったり、ご飯を食べに行ったり、コンサートに行ったりした。一番の思い出は、1 月に課外授業で Кузьково 公園に行ったこ

と。道中雪をぶつけ合いながら公園内を巡った。先生の説明は面白かったし、学生同士で楽しく会話もできた。Друзья мои, прекрасен наш союз! すばらしいクラスメートに恵まれてとても幸せだった。

ロシアの友達が欲しかったため、ロシア版フェイスブックこと「VK」を通じて、日本に興味のあるロシア出身の人たちと交流をした。モスクワには複数の日本語会話クラブがあり、主に VK で情報発信をしている。連絡するのはかなり勇気がいったが、クラブに参加したおかげで何人か親しい友達と出会うことができた。私が主に参加したのは、ВШЭ (国立研究大学高等経済学院) の「Русьби」(むすび)、МГЛУ (モスクワ国立言語大学) のクラブ「話しやすい」、日本語教師主催の社会人クラブ「ひだまり」の三つである。ほかにもいくつかの会話クラブやグループに参加させていただいた。また、日本文化に関するイベント(尺八演奏、歌舞伎クラブによる発表など)も定期的に開催されている。

アニメや日本文化について一緒に語り合うことができたのはとても楽しかったし、日本に興味を持ってあげることが本当にうれしかった。「黒澤明の映画が好き」「短歌が好き」「アイヌ文化が好き」など、日本に関する興味の幅は広く、会話を通じて、自分はこのなにも自国について無知だったのかと何度も驚いた。ロシアのことをより深く知るためにモスクワに留学したけれども、日本についても深く興味を抱けるようになったと思う。

また、大学時代に三年間だけ学んでいた武道、少林寺拳法部のモスクワ支部に参加させてもらった。練習で使われるのは、もちろん、ほぼロシア語のみである。つたないロシア語で話したり、ネイティブ速度の説明を必死に聞いたりしながら練習に励んだ。一緒に練習に参加していた方々は皆さんとても親切で、私の支離滅裂なロシア語をしっかりと聞いてくださり、何かと気にかけてくださった。この練習を通じて、耳が鍛えられたように感じる。また、様々な年齢・職業の人と交流できたのもとてもよかった。

留学当初怯えていたのが夢であるかのように、モスクワでたくさんのいい人に巡り合うことができた。留學生活が幸せにあふれたものだったのは、ひとえにすばらしい先生、クラスメート、友達、一緒に練習をした同志、名も知らぬ親切な人たちのおかげである。言葉が見つからないくらいに、心から感謝している。

【行ってよかったこと】

最後の不安は、「後悔するのではないか?」ということだった。私は留学するにあたり、会社から休職を許可できないと言われたため、退職することになった。半年間だけの留学のためにこれまでのキャリアを捨てて後悔しないだろうか、という一抹の不安が、心のどこかに留学するまでずっとあった。しかし今は、胸を張って言える。留学して、本当によか

った。

行ってよかったと感じたことはいくつもあるけれど、一番はやはり、「この目でモスクワを見て、現地の人たちとたくさん話をすることができた」ということである。侵攻が始まってからずっと見えなかった、モスクワという首都で暮らす人たちのことを、ほんの少しだけ知ることができた。その場に住んで生活しなければわからない空気感のようなものを感じることができたと思っている。

この戦争のせいで、身近な人を多く亡くした人。ウクライナ詩人の碑に捧げられた花を投げ捨てる人。ナワリヌィ氏追悼のために花を捧げる人。日本とロシアの関係が悪いことを理解していても、それでも日本への関心を捨てない学生さん。この戦争に対して深い罪悪感を抱えている学生さん。スーパーで、常連となった私に「こんにちわ!」と声をかけてくれた店員さん。コンサート後、はしゃぐ私に「気に入ったかい?」と話しかけてくれた年配のご夫婦。寮まで重たい荷物を運んでくれた学生さん。ロシア語が上達した私に、ようやく微笑んでくれた寮の事務員さん。毎回洗濯機の使い方を忘れる私に、いつも丁寧に教えてくれた優しい職員さん。数字ではない、名前だけではない、私たちと同じ等身大の人間としてのロシアに住む人たちと交流できたことは、私にとって、かけがえのない経験となった。マイナス 24 度の極寒の冬の中で、ロシアの人たちの親切はいつでもとても温かかった。



大晦日から元旦にかけて、Парк Горького (ゴーリキー公園) で過ごした時間のことが、最も印象に残っている(写真)。雪が降る中、様々な民族の人たちが音楽に合わせて踊り、誰かがお酒をあげて人々に配り、みんなで声を合わせて「С Новым годом!» (あけましておめでとう! と叫んだ。体が芯から冷えて、本当に生命の危機を感じるくらい寒くて、私はその場で一人ぼっちの日本人だったけれど、心はとても温かかった。

同じくらいよかったと思うのが、「芸術的なもの・ことに触れる機会が非常に多かった」という点である。もちろんものによるが、コンサートや展覧会のチケット代が日本と比べて非常に安い。特に展覧会や博物館は、場所によっては学生

割引価格で、時には無料で入ることができる。モスクワには多くの博物館、美術館があり、それぞれとても興味深く面白かった。半年の間に、クラシックコンサート、ミュージカル、バレエ、オペラなどを数十回見に行った。モスクワには多くの音楽ホールがあり、いずれもとても美しく、席はいつもほぼ満席だった。街中ではストリートミュージシャンが演奏をしていたり、歌を歌っていたり、時には自作の詩を発表したりしていた。演奏を聴くたび、絵画を見るたびに心の何かが満たされるような気持ちになった。

特に思い出に残っているのは、「推し」指揮者と直接話げできたことである。私はクラシック音楽に詳しくも、何か楽器を演奏できるわけでもないのだが、何年前かから好きな指揮者がいた。「ユーリ・シモノフ」というソ連時代から活躍している人で、今年 83 歳になるベテラン指揮者である。直接演奏を聴いただけでも十分幸せだったのだが、何度か演奏を聴いた後、ついに花束を渡すことができた。感動のあまり彼への思いを VK に投稿したところ、見知らぬ女性が「今度彼に会いませんか？」と連絡をしてくれた。その女性のおかげで、留学終了直前の二月末に、コンサートが終わった後、シモノフ氏にお会いすることができた。今でも半分夢のような気がする。私は半年で多少上達したロシア語で、彼が紡いだ音楽に何度も救われたことへの感謝を伝えることができた。いただいた 3 枚の CD は、私の宝物である。

【迷っている人に伝えたいこと】

留学前の 5 月末に、「臍のう胞」という、すい臓に水ぶくれのようなものができる病気になり患していることが発覚した。水ぶくれは 8 センチもの大きさに育っていて手術以外にどうしようもなく、27 歳にして、すい臓半分と脾臓すべてを失う羽目になった。約一か月の入院生活で、術後の痛みに苦しみながら思ったのは、「人生は一度きり」という言葉の切実さだった。明日自分が生きているという保証はない。だったら、自分がやりたいことを、自分のできる範囲で最大限やろう。当時の私にとって、最もやりたいことが「モスクワへ行く」ことだった。誰かに今後の役に立つのかと問われたら、「役に立たないかもしれない、でも私には必要なことだった」と答えるだろう。そもそもその「今後」があるかどうかもわからない自分の人生である。

もしも、周囲からの反対で行くことを迷っているのなら、私は心に従ってほしいと思う。「またいつか」の「いつか」が来ないかもしれないことを、私は自分の病気を通じて知った。もちろん、ロシアの情勢や目標によっては、行かない方がいいこともあると思う。私が今回無事だったのは本当にたまたまである。帰国の 2 週間ほど後に、モスクワでテロがあり、100 人以上が亡くなった。私はもしかしたらその内の一人になっていたかもしれない。

それでも、もし、今のモスクワでロシア語を学びたいと思

う意志があるのなら、モスクワ留学はきつととても有意義な時間になると思う。「ロシア語を学ぶ」以上の、かけがえのない経験を得ることができると信じている。

理不尽な目にあうこともあると思う。ウクライナで多くの人が亡くなる中、モスクワで普通に暮らす人々に対して怒りや悲しみを感じることもあるかもしれない。うまくいかずつらい思いをすることもあるかもしれない。それでも、最後にはきつと「行ってよかった」と思えると思う。

最後に、ロシアで最も愛され親しまれている詩人であるプーシキンの詩を紹介したい。

Я жить хочу, чтоб мыслить и страдать; Я жить хочу,
чтоб мыслить и страдать;

И ведаю, мне будут наслажденья

Меж горестей, забот и тревоженья:

私は生きたい、考え、悩み苦しむために。

悲しみ、心配、動揺の間にも喜びがあることを、私は知っている。(ひがし・さとみ)

《ウズベキスタン留学記》

ブレイクダンスとロシア語留学

前田 修吾 (京都外国語大学)

なぜ、ウズベキスタン留学だったのか？

私は京都外国語大学でロシア語を専攻しており、ロシア語圏の国々に深い関心を持っています。実際に、2022 年にカザフスタン、2023 年 3 月にはウズベキスタンへ旅行しました。これらの経験から中央アジアの魅力を感じ、2023 年 9 月から約 1 年間、交換留学生としてウズベキスタンのタシュケント国立東洋学大学に留学しました。

たくさんのロシア語学習者からよくこういう質問を受けます。「なぜ、カザフスタンではなく、ウズベキスタンへ行ったのか？」 両国に行った経験から話すと、実際にカザフスタンの方がロシア語の普及率は高いです。しかし、本当に普及率だけで国を選んでいいのでしょうか。私は、場所が問題ではなく、自分がどこのコミュニティに所属するかによって、その留学の意味が決まると考えています。端的に言うと、私にとってはウズベキスタンの方が私のフィーリングに合ったということです。だから、自国の伝統を愛し、エキゾチックな国であるウズベキスタンを選びました。

ウズベキスタンの魅力は、美しい伝統文化や食文化などです。実際に、スザニという刺繍や絨毯、工芸品などは非常に繊細で美しいです。バザールで様々なデザインのスザニやウ

ズベキスタンの湯呑みを買って帰ったほど気に入っています。さらに、プロフ、シャシュリク、サムサなどのウズベク料理も絶品です。現地では、よく地元のウズベク料理屋さんでウズベキスタンのラム肉とジャガイモのスープであるショルパーを食べました。ある時期には、毎日プロフを食べていたこともあります。それほどウズベク料理は飽きることなく食べ続けることができました。これらの魅力はウズベキスタンでしか味わえないでしょう。

「語学留学」であると同時に「ダンス留学」でした

では、留学中に私がどのように生活していたのかをお話したいと思います。今回のウズベキスタン留学を一言で表すと「ダンス留学」と言っても過言ではありません。私は 2022 年のカザフスタン旅行で目にしたダンスバトルに影響を受け、帰国後すぐにブレイクダンスを始めました。そして、ウズベキスタン留学中の 10 月に、ソ連圏の大きなダンス大会である「Gorilla Style Wars」に参加しました。これが私にとって人生初のダンス大会参加でした。初めてだったため予選にも出場できませんでしたが、多くのブレイクダンサーたちと知り合うことができました。



人生初めてのダンス大会 Gorilla Style Wars

そこで出会ったウズベク出身のダンサーから「1 年間無料で練習しに来ていいよ」と声をかけてもらい、週に 3~4 日彼のところへ練習に通うようになりました。練習では他のブレイクダンサーや練習生の子供たちと共に練習していました。練習では、ロシア語も飛び交います。ブレイクダンスだけでなくロシア語の練習もできました。時には小規模のダンスバトルにも参加し、経験を積みました。

そのような生活を続け、3 月に Gorilla が主催する「Almaty Dance Fest」に参加するためにカザフスタンへ行きました。これは留学中最後のダンス大会で、初めてダンス大会に参加した時の自分と比べ、どれだけ成長したのかを試す機会でもありました。実際に、ダンスのバリエーションもかなり増え、成長を実感できました。そして、その大会でも人脈を広げ、カザフスタンの世界的に有名なブレイクダンサーやインドの

チャンピオンとも出会うことができました。

ブレイクダンスとロシア語を学んでいたおかげで、このような素晴らしい体験をすることができました。これは、ブレイクダンスだけでなく、何か趣味を持って留学することが良い経験を得る手助けになると考えています。

さまざまな「一期一会」と友人の輪

留学中、日本で出会ったロシア人の友人から、ウズベキスタンに住んでいる知り合いの女性を紹介してもらいました。彼女はウズベキスタンで育ち、ウラジオストクの大学を卒業し、現在はウズベキスタンで働いています。彼女は日本に興味があり、様々な日本の話をすることができました。また、5 月に彼女の友人がウラジオストクからウズベキスタンへ来ました。朝、彼女の家に招かれ、家族と彼女の友人と一緒に朝食を取りました。お母さんが作ったカーシャは忘れられないほどの絶品でした。また、彼女の友人はカムチャッカからサーモンを持ってきてくれて、それも食べさせてもらいました。その瞬間は、ウズベキスタンにいることを忘れ、まるでロシアにいるかのように感じました。

その後、チムガンというタシュケントから約 2 時間で行くことができる山と湖がある観光地に行きました。山から見る景色は壮大で美しかったです。帰宅後、一緒にモノポリヤというボードゲームをして盛り上がったことも、非常に良い思い出の一つです。

4 月には、サンクト・ペテルブルクからウズベク語を勉強するためにウズベキスタンへ短期留学しに来た学生たちと一緒に 2 週間過ごしました。彼らと共に日本料理を楽しみ、カラオケをし、タシュケントのさまざまな観光地を訪れました。オーナーが日本人の日本料理店で、本物の日本料理をロシア人に紹介できたことはとても嬉しかったです。また、ロシアの曲をロシア人と一緒に歌えたことも良い思い出です。このような異文化交流は、世界平和への架け橋になると信じています。

旧ソ連の国々では、日本人が少ないため、その人の行動は日本人としての印象を強く与えることとなります。そのため、ウズベキスタンにいる間、自分の行動が日本人を代表するものだと自覚して行動していました。このような責任ある積極的な行動が、世界に日本人の良い印象を与えることになると思います。

留学生活の 1 日～ウズベク語も勉強

では、普段どのように 1 日を過ごしていたのかを述べたいと思います。朝 6 時に起床し、大学に行く準備をしてから、9 時までロシア語の勉強をしました。そして約 1 時間かけて大学に行きました。最初の授業はウズベク語で、授業は 1 時間 20 分ですが、よく延長されました。授業の冒頭では先生とウズベク語で会話をし、その後文法の授業が行われます。

次の授業はロシア語で、毎回、先生は「今日の日付、今日の天気、今日の気分」を学生に尋ねてから授業が始まりました。授業の内容は基本的に文法でしたが、長文もよく読まされました。私はロシア語での会話は得意でしたが、読解が苦手だったので、よく先生から注意されました。しかし、厳しい指導のおかげでロシア語のレベルを高めることができたと思います。

授業後は食堂で昼食を取り、その後すぐに大学の図書館へ行き、宿題をしました。18 時頃に終わり、大学近くのカフェで夕食を取り、その後ブレイクダンスの練習場へ行って、23 時頃には帰宅するという生活でした。

ブレイクダンスの練習に行かない日は、授業後すぐに家に帰り、ロシア語の勉強をしていました。食事は自炊もしており、鍋で米を炊き、鶏肉を焼いて食べました。ウズベキスタンは物価が比較的に安いので、自炊すればかなり安く暮らすことができますと思います。

休日は積極的に外へ出かける

休日は、金曜日から日曜日まで週 3 日ありました。予定がない日は家にこもってロシア語の勉強をしていました。しかし、予定がある場合は外へ出て、さまざまな友人と過ごしました。一番気に入った場所はアイススケート場です。日本で一度、ロシア人にアイススケートの滑り方を教えてもらったことがありました。それから 1 年以上経っていましたが、滑り方を覚えていました。現地の友達にはアイススケートが上手でしたが、私はまだ初心者だったのでぎこちない滑り方でしたが、転ばずに滑ることができました。友人と一緒にアイススケートを楽しむことができ、とても充実した時間を過ごすことができました。

実は、スケートに行った日の翌日にロシアの金メダリスト、エフゲニー・プルシェンコのフィギュアスケートの公演がありました。その公演の題目は「白鳥の湖」で、さまざまなプロフィギュアスケーターが出演していました。人生で初めて本物のフィギュアスケートを見たので、とても感動しました。前日にはあれほど難しかったリングの上を彼らは美しく滑っていました。これがきっかけで、一層スケートへの関心が高まりました。

また、日本人抑留者が作ったと言われているナヴォイ劇場に 2 回バレエとオペラの公演を見に行ったことがあります。

1 回目はバレエ公演で、「白鳥の湖」でした。チケットはそれほど高くなく、良い席を取ることができました。劇場内には、ウズベキスタン国内の 6 つの地域をテーマにした休憩スペースがあり、それぞれの部屋の奥の壁には各地域の風景画が掛けてあります。劇が始まる前に、絵画を楽しむことができました。また、公演中は本物のオーケストラが演奏しており、チャイコフスキーの楽曲を楽しむことができました。さらに、バレエの表現力の美しさにも感動しました。

2 回目は、「詩人の心」というウズベキスタンのオペラ公演でした。オペラは、美しい声だけでなく、舞台の演者の動きも豊かで、大変興味深かったです。ウズベキスタンは芸術の分野も豊富であり、芸術に関する感性が磨かれたと感じています。

さらに、2 月のある休日に標高 1800 メートルを超える山へ登山をしました。その山はチムガンにあり、現地の旅行会社を通して友人と参加しました。ウズベキスタンでは、テレ



標高 1800 メートルの山頂にて(チムガン)

グラムで旅行会社のチャンネルを通じて、そのようなツアーに参加することができます。参加者は 20 人ほどいて、ロシア人がかなり多かったです。山には雪が積もっており、雪対策をした装備品で行かなければなりませんでした。道中は雪道だったので、それほど辛くなく登ることができました。頂上で感動的な景色を眺めながら、友人が作ってくれたオープンサンドを頂きました。この体験は、ウズベキスタン留学の中で忘れられない思い出となりました。

今回のウズベキスタン留学では、ロシア語を通してさまざまな貴重な経験をすることができました。これらの経験ができたのも、ウズベキスタンで知り合った友人やお世話になった先生方のおかげです。また、ロシア語学習を始めたからこそ得ることができた素晴らしい経験だとも思っています。この留学は、私の価値観や知識をより深めてくれました。この経験とロシア語を活かして、今後日本と旧ソ連圏の国々との交流に貢献していきたいと考えています。

(まえだ・しゅうご)



大阪大学ロシアサークル・ラスヴェート

日露学生交流の「夜明け」をめざして

杉本苑華 (ロシアサークル・ラスヴェート代表)

皆さん、こんにちは！ラスヴェートの代表、杉本苑華と申します。今回は縁あって JIC インフォメーションに記事を書かせていただく機会を頂きました。サークルのこれまでや、ポストコロナ下での活動をご紹介します。少しでも活動のイメージが湧けば幸いです。

・ラスヴェートって、どんな団体？

私たちラスヴェートはロシア圏に興味のある大阪大学の学生が集まって、言語や文化について自ら学びを深めるサークルです。現在はロシア語専攻の学生のみならず、中国語専攻の学生や工学部の学生、ロシア人留学生を含め計 48 名の学生で活動をしています。

・ラスヴェートってどういう意味？

ラスヴェートはロシア語で「夜明け」を意味します。私が大学 4 年生になる前まで、「関西日ロ学生連合セーミチキ」という、日露の学生交流を目的としたサークルが存在していました。セーミチキは「日ロ学生交流会関西支部」を前身として 2017 年に創設されましたが、コロナウイルスの流行やロシアのウクライナ侵攻により、その活動は急激に減少しました。

私は、年々活動が減少していく中で苦悩する先輩方の姿や、ロシア語学科に入学したことへの不安や後悔、そしてロシア留学が困難な状況でロシア語を学ぶモチベーションを維持するのに苦勞する後輩たちの姿を目の当たりにしてきました。

私たちは、まず自分たちで学びを深めることで、ロシアとの新しい交流の方法を模索していきたいと考えています。そして、停滞してしまった日露間の交流に「夜明け」を迎えることを目指して、新たにこのサークルを立ち上げました！

・どういう活動をしているの？

私が代表として大切にしていることは、ラスヴェートの前身であるセーミチキに大学 1 年生から唯一所属していた経験を活かし、後輩たちに多くの学びの機会を提供し、伝承していくことです。今年 4 月にサークルを立ち上げ、ロシア語勉強会や食事会、料理会、映画鑑賞会など、様々な活動を実施してきました。もちろん、先輩方から聞いていた「リヤザン・ノボシビルスク夏期交換留学プロジェクト」を再開させたい気持ちは山々ですが、この 3 か月間で特に注力してきた活動が 3 つありますので、ご紹介させていただきます。

1 つ目は新入生歓迎会です。活動を進めていくためには、まずメンバーがいなければなりません。私が大学 1 年生の頃



カフェ・ボーチカでの新入生歓迎会

から参加していた「ひまわりプロジェクト」を主催する「カフェ・ボーチカ」(谷町六丁目駅から徒歩 5 分)のオーナー岩崎真和氏のご厚意により、「カフェ・ボーチカ」で新入生歓迎会を実施することができました。新入生たちは初めてロシア人留学生と対面し、緊張しながらも、岩崎さんやロシア人留学生からロシア料理について多くを学び、自然な流れで日露交流ができたと思います。

2 つ目は他大学や他サークルとの交流企画です。一般社団法人欧亜創生会議や日ロ学生交流会関東支部の皆さんと連携し、東西の垣根を越えてロシア語を学ぶ学生たちを盛り上げています。7 月から欧亜創生会議の協力により、国際的な情報を発信するクオリティマガジン『Lector Inspirits』の取材に挑戦する予定です。取材方法からすべて教えていただけるとのことです、非常に楽しみです。また、日ロ学生交流会関東支部の招待を受けて、モスクワ市立大学の学生と ZOOM 交流会を実施し、現地に行くことが難しい中でも、生のロシア語を聞く貴重な機会を得ることができました。

3 つ目は、8 月に予定しているロシア政治経済の勉強会です。講師は NHK 元モスクワ支局長で現 NHK 中国総局長の石川慎介氏にお願いしています。私が大学 1 年生の時にセーミチキ主催で開催されたのですが、3 年ぶりとなる今回ラスヴェートとしては初めての開催が実現しそうです。

これらの活動を通じて、メンバーのみんなが多くの学びと経験を得られるよう、今後も尽力していく決意です。是非、応援してください。

・留学生会員＋他大学・他サークルとのコラボ企画募集中！
私たちは新たに留学生会員や他大学・他サークルとのコラボ企画を募集しています！！！！！！
興味を持たれた学生の方は、気軽に QR コードからご連絡いただければ幸いです！！！！ (すぎもと・そのか)

X(Twitter)



Instagram





5月17日、神戸にオープン！ ロシアカフェ「ミーシカ」

榎本 真奈美 (ロシア語教師)

神戸、二宮神社のすぐ近くに個性的なカフェがオープンした。ロシアカフェ神戸「ミーシカ」(「ミーシカ」はロシア語で子グマの意味)だ。オーナーは古池麻衣子さんと、神戸市垂水区出身の生粋の神戸っ子だ。

おもえば神戸モロゾフの生みの親、モロゾフ家が経営した洋菓子店「コスモポリタン」が神戸三宮センター街の喫茶店を閉じたのは2006年。また、1951年創業のロシア料理店「バラライカ」は2023年に閉店してしまった。神戸に本格的なロシア料理が食べられるお店がなくなって寂しいと感じていた人には嬉しい朗報だ。

扉を開くと、お店のシンボル「子グマのミーシカ」が迎えてくれる。店内はロシアの伝統模様「ホフロマ模様」をアクセントに、ピンクを基調とした可愛らしい内装だ。すべて古池さんが手作業で描き、色を塗って仕上げた。

ロシアカフェ「ミーシカ」でひととき目を惹くのは、ロシア製の素敵な食器だ。ロシアを代表する陶磁器「グジュリ」や「インペリアル・ポーセレン(ロモノーソフ磁器)」、ソ連時代のアンティーク食器まで華やかなカップでいただくお茶は格別なひとときを約束してくれる。

メニューにもこだわりがある。クラスノダール地方産の香り高い紅茶「アゼルチャイ」や、古来ロシアで健康維持のために愛飲されビタミンとミネラルをたっぷり含んだ「イワ

ン・チャイ」、コーヒーの代用品としてお馴染みの「チョコリコーヒー」など、他では味わえないロシアのハーブティーを揃えている。

そして何より、ミーシカのオリジナルドリンクが美味しくてたまらない。ビーツとホエイ(乳清)をソーダで割った色鮮やかなドリンク、その名も「赤の広場」。氷になったビーツとホエイが少しずつソーダに溶けていき、味の変化を楽しみながらいただく清涼感たっぷりのドリンクは、美容効果も抜群で夏にいただきたい一品だ。この「赤の広場」にウォッカを加えたオリジナルカクテル「おそロシア」も楽しめる。飲みやすさと美味しさ、遊び心を兼ね備えた危険なカクテルを、ぜひお試しあれ。

もともと料理好きの古池さんは、日本では本場の味を楽しめる所が少ないと感じ、独学でロシア料理を研究、試作を重ねて独自のレシピを生み出している。生地を丁寧に発酵させて作るピロシキは、キャベツ入り、タマゴとひき肉入りなどの数種類を取り揃え、店内のオーブンで焼き上げる。毎日でも食べなくなる素朴で優しい味に仕上がっている。その他、ボルシチ、ペリメニ(ロシア風水餃子)、ロシアの定番デザート「スイローク」もカッテージチーズを使った手作りだ。

古池さんはイタリアのパチカンに関心を持ち、イタリアを何度も訪れる中で、偶然、ロシア旅行をしたところ、ひと惚れしたという。初めての訪ロでいきなりトラブルに巻き込まれたが、通りかかったロシア人に助けられ、その後も数々の素敵な出会いがあった。どこに行っても気さくに声をかけて話かけてくるロシア人に嬉しい驚きを感じたという。心を驚つかみにされ、世界一小さな国から世界一大きな国へ、関心対象を転換することになる。

2022年のロシアによるウクライナ侵攻も相まってそのイメージは悪化の一途を辿り、この時期の開業には勇気も要るはずだ。しかしそんな不安は感じておらず、今後は音楽イベントなど文化サロンのような場所として、また、ロシア製のお茶やハチミツ、お菓子などを販売するアンテナショップとしても利用できる店舗にしたい、と抱負を語ってくれた。

「今はニュース等でロシアの悪いイメージが溢れていますが、私が知るロシアやロシア人はとても温かくて明るく、思いやりに溢れています。ヨーロッパと比べると、ロシア人と日本人は似ているところもあり、親近感を覚えます。私は自分が美味しい、かわいい、と思うもの、自分が好きなものを通して、ロシアの良い面も知ってもらえたらと思います。偏見だけで拒否せずに、どんなところなのか、ぜひお店に来て体験してみてください」

ロシアカフェ神戸「ミーシカ」

アドレス：神戸市中央区琴ノ緒町1丁目8-9

電話番号：078-380-5381

営業時間：11:30~19:00

ウクライナ侵攻から2年 日本からロシアへの渡航状況

~増えてきた中国経由のモスクワ、極東方面への渡航者

杉浦 信也 (ジェーアイシー旅行センター株式会社 代表取締役)

新型コロナウイルス感染症の終局がようやく見えてきたかと思われた 2022 年 2 月ロシアが突然ウクライナに侵攻。以来、日本外務省はロシアに海外危険情報でレベル 3：渡航中止勧告 (ウクライナ国境周辺地域はレベル 4：退避勧告) を発出したままとなっています。また、ご存じの通り日本からモスクワ、ウラジオストクなどへのアエロフロート、日本航空、シベリア航空などの直行便も運休され再開のめどが未だ立っていません。

一方、私たちもロシア方面への専門旅行社として毎日のように「今、ロシアへは行けますでしょうか。」「ロシアへの留学することは可能なのでしょうか。」といった問い合わせを多くの方々から受けています。お答えとしては以下の 3 点を説明させていただいています。

- ①ロシアへの渡航および留学もコロナ以前の状況(2019 年頃)と大きく変わらず可能で、観光、ビジネス、留学ともビザは通常通り発給されていること。
- ②ただし、不便な点として日本からの直行便が運休になっているため経由便しかなく、日本で発行された VISA、マスターなどのカードが利用できないためドル・ユーロなどの現金を持って行って現地で両替をしなければいけないこと。
- ③そして上記の通り、外務省から「渡航中止勧告」が発出されていること。

ロシアビザは通常通り発給されているが……。

実際、直行便が運休している状態は変わりませんが、北京、上海、ハルビン経由など中国経由便のバリエーションが豊富になりつつあり、かつ中国系の航空便はシベリア上空を飛ぶことができるので最短ルートでモスクワやペテルブルグにたどり着くことができます。また日ロ間のビザは両政府間の領事協定に基づいて発給されていますが、アメリカや EU 諸国がウクライナ制裁に伴いロシア国籍者に対するビザ発給を制限し、EU 加盟国はロシアとのビザ発給円滑化協定を全面停止したのに対し、2013 年に日ロ間で締結された日ロ査証簡素化協定は継続されています。

ロシア人にとって日本は G7 で最もビザ取得の容易な国に！

昨年ロシア人の日本への入国者数は実に 41,965 人となり、コロナ前の 2019 年、年間 12 万人超には及びませんが、前年比 306%増になっています (日本政府観光局 JNTO 統計)。

一方、日本からロシアへの渡航者数も 2019 年には年間 10 万人に達していましたが、ロシア側の統計が発表されていないため明確ではありませんが、昨年度は 1 万人を超えるかど

うかというレベルだと想像されます。

ロシアに限らず日本人の海外渡航者数そのものが円安の影響もあり、今年でさえ 2019 年比 7 割程度にとどまると予測されていますが、ロシアに関してはやはり外務省の危険情報レベル 3「渡航中止勧告」が、日本人渡航者にとって航空便やビザの問題よりも一番の精神的なネックになっています。

大学のロシア語学科はロシア留学の中止が続く。 中央アジアへの代替留学へ

ロシア語学科やロシア語コースがありロシアとの交換留学の制度を実施している多くの大学もこのような状況下でロシアへの学生の派遣を中止しています。私たち JIC はロシアの各大学へ留学生の派遣を継続していますが、第二外国語でロシア語を受講した学生さんや社会人の方が中心になっています。ロシアへの留学を希望するロシア語学科の学生さんたちの多くは、代替としてカザフスタン、ウズベキスタンといった中央アジアの国への留学を余儀なくされている状況です。ロシア語を本格的に学習したいと思っている人ほど逆にロシアに留学することが困難になっています。

今年 JIC では 8 月にロシア極東連邦大学で夏期ロシア語研修を行うことにしました。研修の形態は少し勇気と慎重さが必要でしたが、旅行業法で規定されている「募集型企画旅行」として実施することにしました。いわゆる海外ツアーとして販売されているものと同じで、日程が計画通りに実施されるよう旅程を管理する義務が伴いますが、参加者の方々に安心して参加いただけるよう敢えてツアー型の募集形態をとることにしました。

ロシアのウクライナ侵攻から 2 年以上が過ぎました。昨年までは事態が改善するまでの経過措置として次善の策をあれこれ考えていましたが、戦況からするとこの状態が数年は常態となりそうです。ロシア語を勉強している学生さんや企業の皆様も同じだと思いますが、リスクは考慮に入れつつもこの条件下でロシアとの間で実現可能なことを見極めて、着実に実行していくしかない段階に入ったと考えるようになりました。

◆ 現在のロシア方面への航空便のスケジュールや渡航の際の注意事項はこちらを参照してください。

<https://www.jic-web.co.jp/pdf/air.pdf>

https://www.jic-web.co.jp/pdf/entry_russia.pdf

※本稿は、JSN の「月間ロシア通信」Vol.290 June,2024 の『ロシア雑感』に寄稿したものです (一部加筆しました)。

こんな時代にロシア語のすすめ 第8回

「万雷の拍手が好きなソ連人」

黒田 龍之助



40 年ほど前のモスクワ・シェレメチェボ第 2 空港

実をいえば、ロシアにはもう 20 年以上も訪れていません。最近ではチェコとか、クロアチアとか、東欧圏ばかり。いまの興味が、そちらに向いていることもあります。

大学生から大学院生にかけては、海外へ出かけると行ったら旧ソ連に決まっていた。十代半ばからロシア語を目指してきたのですから、現地に行きたいのは当然です。でも残念ながら、留学の機会には恵まれませんでした。自分で旅行するにしても、費用がかかりますから、頻繁には行けません。

だからたいていは、JIC の通訳として現地に赴きました。

旧ソ連に限られていたかもしれませんが、その代わりあちこち飛び回りました。現在では多くの国に分かれてしまいましたので、今にして思えば、けっこう広い地域で経験を積んできたともいえます。

大きな国でしたから、移動は基本的に飛行機でした。旧ソ連時代の航空会社といえば、お馴染みのアエロフロート。当然ながら通訳で出かけるたびに、必ずお世話になりました。ときには日本の旅行社によるチャーター便ということがあり、そうすると乗客は日本人ばかり。あるときロシア人の客室乗務員が、わたしに機内放送のアナウンスを頼んできました。

原稿が渡されます。ロシア語版と日本語版の二種類あって、日本語版はすべてキリル文字で書かれていました。ロシア人はこれを、意味もわからず読み上げるのでしょうか。だったら日本人にやらせたほうが楽ですよ。しかしこれは読み難い。そこでロシア語版も参照させてもらい、アナウンスする内容を即興で考えました。

「みなさま、本日はアエロフロート航空をご利用いただきまして、誠にありがとうございます……」

それっぽく訳したつもりだったのですが、実は機内放送の日本語アナウンスなんて、あまり聞いたことがありませんでした。旧ソ連は飛び回っていても、日本国内を飛行機で移動する経験は、ほとんどなかったのです。だからきっとテレビドラマ（たとえば『スチュワーデス物語』とか）の真似みたいなものだったに違いありません。思い出すと恥ずかしい。

飛行機が着陸したら拍手をする。この習慣は今もあるのでしょうか。

はじめてのときは驚きました。モスクワやレニングラード

に到着の際、飛行機が無事に着陸して滑走路を滑り出すと、機内のあちらこちらから拍手が起こるのです。みなさん遠慮がちに、それでもほぼ全員がパチパチとやります。

無事に着陸してよかったね、機長さんありがとう。

そんな気持ちが込められるのではないのでしょうか。悪くない習慣です。

旧ソ連は拍手が好きな国でした。JIC から派遣されるときは、友好団とか親善交流とか、そういう関係が多かったので、たいていは和やかな雰囲気。政治会談やビジネス交渉ではないのです。ところが、いかんせん言語が通じない。かといって、お互いニコニコしているだけでは疲れる。だから拍手なのではないか。当時はそんなふうに考えていました。

一方、新聞の政治欄では「嵐のような拍手」が定番表現で、権力者のご機嫌を損ねないよう頑張るって拍手するのだというような噂が、まことしやかに流れていました。そちらが和やかだったどうかは、幸か不幸か知りません。

話を飛行機に戻しますと、わたしはこの着陸時の拍手が、世界共通の習慣だとばかり信じていました。井の中の蛙ってやつです。アエロフロート以外の飛行機でヨーロッパに着陸したとき、いつもの調子で拍手をしたら、周囲の乗客から不思議そうな眼で見られ、あれは恥ずかしかったなあ。

反対の例もあります。1990 年代半ば、韓国語を専攻する若い友人と、ソウルからタシケントまで飛びました。ウズベク航空の機内は、あの懐かしい雰囲気。手荷物を無理やり積み上げるお婆さん、長時間座っていたから腰が痛いといって通路で踊り出すお姉さん、さらには手荷物からどうして所持しているのかナイフを取り出して、タマネギをスライスするおっさん……。友人はあつけに取られていましたが、何よりも驚いたのが着陸時の拍手」でした。

いったい、なんなんですか？

わたしはかつて自分にされた説明を、友人にくり返しました。アジアのワイルドな地域をあちこち旅行し、経験を積んできた彼でさえも、この経験は新鮮だったようです。

ただし、いつでも拍手をすればいいというものではありません。

というか、まったく拍手をする気になれなかったことがありました。

1990 年代後半あたりから、ヨーロッパに出かけることが多くなるのですが、あるときドイツのベルリンからモスクワ経由で日本に帰ることがありました。ヨーロッパでカミさんと語学研修を受け、その後すこし旅行したりしたのですが、日本を出国してから一ヶ月半、ベルリンに到着したときには、さすがに疲れていました。それでも荷物もすべて預け、あとは飛行機を乗り継いで帰るだけ。機内ではゆっくりしよう。

モスクワまでの飛行機は小型で、空港では機体のそばまで歩かされました。空港施設と直接に接続できないのでしょうか。近づいてみれば、あまり新しくない、というか、明らかにボロい機体。しかもそこにはロシア語だけでなく、某アジアの言語でも併記。なんか不吉な予感。搭乗し、座席に腰を下ろして周囲を見回すと、機内はなんだか薄汚れていて、通路を挟んだ隣の座席は、シートベルトが千切れていました。

飛行機は定刻に飛び立ち、高度が安定してくると食事の時間となります。エアフロートの食事は残念ながら、今も昔もあまり評判がよろしくないようですが、それでもワインを頼んでハムなどをつまんでいけば、心が和みます。やれやれ、今回も無事に終わったな。

ところがです。機内がガタガタと揺れ始めました。気流の悪いところに入ったのでしょうか。多少ならよくあることですが、そのときの揺れは治まるどころか、激しくなる一方。機内放送が入り、この先も揺れがひどくなるので、食事は中止だとのこと。客室乗務員が来て、食べかけの食事を持ち去ります。あらら。ですが飲み損ねたワインを悔やんでいる場合ではありません。揺れはどんどん酷くなり、もう水すら飲めません。

ヒューン。

ジェットコースター並みです。

飛行機が急降下するのがわかりました。今ので何メートル下がったのでしょうか。しかもそれがくり返されるのです。生きた心地がしません。あのときはカミさんと二人、短い人生を嘆く気持ちになったことを、ここに告白します。いや、本気で死ぬと思いました。

さんざん揉まれた挙句、ようやくモスクワへ到着しました。周りの乗客もやれやれといった表情。機内放送が入り、機長からお気楽なあいさつ。「ずいぶん揺れましたが、とりあえずモスクワに着いたのですから、いや、よかったよかった」

ふざけんな！

このときは誰も拍手しなかったことを覚えています。

そんなこともありましたが、わたしはこの着陸時の拍手が今でも好きで、飛行機が到着して滑走路を滑り出すとき、こっそりと拍手をしているのです。

<日ロ交流情報>

日本ウラジオストク協会が総会 (4月13日) 「生田のウラジオ」ロシア料理店 TWINS にて



日本・ウラジオストク協会（藤本和貴夫会長）の年次総会が 4 月 13 日に行われました。会場は「生田のウラジオストク」こと、ウラジオストク出身の双子姉妹 田中ダイアナさんと斉木エレーナさんが川崎市生田で営むロシア料理店「TWINS ツインズ」。

定例の活動報告や決算、予算などの確認のあとは、ツインズの 2 人を囲んで懇談サロンが行なわれました。ボリュームたっぷりのボルシチ、ロールキャベツやペルメニなど本格ロシア料理を楽しみながら、在日歴 20 年の 2 人がこの時期に生田でロシア料理店を開いたわけ（開業は 23 年 8 月）や、伝統ロシア料理へのこだわり、プロの画家でもあるエレーナさんが手づから描いたホフロマ絵の内装など、ロシア料理や文化を通して、もっともっとロシアを理解してもらいたいという思いを聞かせていただきました。

ロシア文化フェスティバル 2024 in Japan 日露合同オープニングコンサート(4月22日)



ロシア文化フェスティバルの今年のオープニングコンサートが、4 月 22 日、紀尾井ホール（東京都千代田区）にて開催

されました。サンクトペテルブルグ音楽会館から派遣された L・ジュラフスキー（クラリネット）、E・クリュチュエリョヴァ（ピアノ）、A・タラヌハ（パーカッション）の 3 名のソリストを迎え、日本側は前橋汀子（ヴァイオリン）、松田華音（ピアノ）らが出演。それぞれ素晴らしい演奏を披露しました。

冒頭の主催者あいさつでは、2 月に着任したばかりのニコライ・ノズドリェフ駐日ロシア大使が、2006 年の開始以来積み重ねられてきたロシア文化フェスティバルの意義を確認するとともに、「ロ日両国間に意見の異なる問題はあっても、お互いに理解しあうために、文化交流を進める必要がある」と述べ、今後もロシア文化フェスティバルを継続していく考えを表明しました。

ロシア語映画発掘上映会

「デジャ ヴュ」(5 月 4 日)、「ザレチナヤ通りの春」(6 月 29 日)の 2 作品を上映



エース・スクエア（守屋愛さん）が主催するロシア語映画発掘上映会は、今年も快進撃を続けています。今年はおデーサ映画スタジオの作品を集中的に取り上げるようで、5 月 4 日に「デジャ ヴュ」ДЕЖА ВЮ（ユリウシュ・マフルスキ監督／1989 年ソ連・ポーランド合作）、6 月 29 日に「ザレチナヤ通りの春」Весна на Заречной улице（監督；マルレン・フィツイエフ、フェリクス・ミロネル／1956 年ソ連）が、東京都港区の札ノ辻スクエアで上映されました。100 席余りのホールはこのところ毎回満席。上映後のミニレクチャーも映画内容の理解を深め、さらに観客の興味を広げる役割を効果的に果たしています。

次の上映会は、8 月 13～15 日に、連続ドラマ「待ち合わせ場所は変えられない」（全 5 回）が予定されています。詳しくは、エース・スクエアのホームページで確認ください。

<https://sites.google.com/view/acesquare>

大阪日ロ協会の講演会（6 月 22 日） 藤本理事長がウラジオストク訪問を報告



6 月 22 日、大阪日ロ協会の講演会が、大阪市内の会場とオンライン併用で開催されました。内容は、藤本和貴夫理事長（大阪大学名誉教授）のロシア極東訪問の報告。藤本理事長はロシア科学アカデミー極東支部 歴史・考古学・民族学研究所などの招きで 4 月下旬にウラジオストクとハバロフスクを訪問し、ロシアの研究者たちと意見交換を行いました。22 年 2 月のウクライナ侵攻以来、日ロ両国間では鋭い対立と緊張が続いていますが、そんな中でも将来の関係改善を見据えて対話の芽を残そうと、ロシア側日本側ともに水面下での模索が続いていることが報告されました。

横山周導師の百寿を祝う会

イワノフカ村慰霊の旅参加者が集う(6 月 23 日)



シベリア出兵（1918 - 22 年）で日本軍に虐殺されたロシア・アムール州イワノフカ村の村民の慰霊と、シベリア抑留（1945 - 56 年）で強制労働につき現地で死没した日本人捕虜の慰霊を、ともに平和を願う日ロ両国民が合同で行うために、「イワノフカ村墓参与交流の旅」を長年続けてきた岐阜県・勝善寺の住職、横山周導師の百寿を祝う会が、6 月 23

日にありました。当日は、これまでの墓参の旅参加者 20 数名が勝善寺（岐阜県揖斐川町）を訪れ、横山周導師と面談して花束と記念品を手渡した後、近くの温泉施設で会食・懇親会を行いました。横山師は今年 10 月で百寿を迎えますが、1945 年 8 月、19 歳の時に満州国境でソ連軍の捕虜となり、コムモール・ナ・アムーレで 2 年間の抑留生活を送りました。



。「100 年のうち抑留の 2 年間は、辛くもあったが自分にとって人生が変わる体験だった。日本は戦後 80 年間平和憲法のもとで戦争を経験せずに来た。世界にはまだ 2 億人の難民が困難にあえいでいるのに、こんな幸せな国はない。この戦争のない状態を世界中に広げてほしい」と、しっかり

した口調で話をされました。

祝う会には、今年 3 月に単身イワノフカ村を訪れた斎藤寛さん（本誌 229 号参照）も参加、横山周導師の世界平和への強い意志をこれからも何らかの形で引き継いでいこうと、一同思いを新たにしました。

日口友好愛知の会が総会（6 月 29 日） 今年もオンライン墓参など方針確認



6 月 29 日、名古屋駅前の名古屋国鉄会館にて、一般社団法人日口友好愛知の会の第 9 回定期総会が開催されました。総会では、ノボシビルスクの日本人抑留者墓地へのオンライン墓参を今年も実施することなどの方針が確認されました。総会後の講演会では、藤本和貴夫・大阪大学名誉教授が、最近のウラジオストク・ハバロフスク訪問の報告など、日口関係について講演を行いました。



JIC ロシア語講座交流会 東京でも開催（6 月 30 日）

小原 浩子（JIC 大阪）

本誌第 229 号で JIC ロシア語講座交流会（関西）の報告をしましたが、6 月 30 日に関東圏でも受講生交流会（食事会）を開催しました。会場は吉祥寺のカフェロシア（cafe Россия）です。

今回は東京在住の 2 人の先生（ガリーナ先生・エレナ先生）と東京近郊の受講生 6 名に参加していただきました。北海道から（所用のついでに）参加した人もいて、びっくりすると同時に大変ありがたく思いました。関西での交流会と同様に、最初ロシア語で自己紹介をお願いしたのですが、中上級クラスの方はよどみなくロシア語が出てきて、まさに「継続は力なり」を実感しました。

その後、ガリーナ先生のクラスと、エレナ先生のクラスに分かれる形で、それぞれ普段はなかなか話せないロシアにまつわるエピソードや趣味の話などをして、盛り上がりました。事務局の私からも、JIC とロシア旅行・ロシア語留学の現状について報告し、ロシアに行く日本人旅行者はまだまだ少ないけれど、ロシア人訪日客は今もたくさん日本に来ていることなどを伝えました。

カフェロシアでの食事はとてもおいしかったです。注文した「ロシアセット」はロシアでの一般的な昼食(обед)で、前菜・スープ・メイン・デザートのコースなのですが、スープ（ボルシチ）が終わった時点で満腹状態、次にメインが出てきたときには慌てるほどボリューム満点でした。休日の昼食時、カフェにはひっきりなしにお客が来店し、ずっと満席状態でした。

4 月から始まったロシア語講座も 3 か月が過ぎ、入門や初級クラスでは新しい文法事項に四苦八苦している人も多いかと思えます。しかし、自分の目標を持って、コツコツと粘り強く勉強を続ければ、いつか必ず滑らかに言葉が出てくる日が来るはずですよ。皆さん頑張ってください！
かく言う私も、ロシア語頑張ります。

吉祥寺カフェロシア（ロシア・ジョージア料理店）
<https://caferussia.web.fc2.com/>

「天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち」Vol.13

モスクワ・クアルテット招き大使館、領事館でコンサート



メゾソプラノ歌手・天野加代子さんとロシア民族楽器の巨匠たち（モスクワ・クアルテット）のコンサートが、7 月 6 日に在大阪ロシア総領事館で、また 7 月 10 日に在日ロシア大使館で開かれました。

「長い道」「夜」「黒い瞳」などロシアンロマンスを歌い上げる天野さんの艶やかな歌声と、民族楽器ドムラ、バラライカ、グースリー、そしてピアノの卓越した演奏がホールを埋めた

観客を魅了しました。大阪音楽大学を卒業後、モスクワ音楽院で学び、外国人初のモスクワ国立音楽協会専属ソリストとなった天野加代子さんは、毎年ロシア各地でコンサートを行うと同時に、日本にもモスクワ・クアルテットなどロシアの音楽家を招聘して、日ロの音楽交流を活発に続けています。天野さんの精力的な活動にエールを送りたいと思います。（写真；左＝大阪の総領事館にて、右＝東京の大使館にて）

インタビュー／天野加代子さん（声楽家、メゾソプラノ）

私の人生を変えてくれたロシアとの出会い

—— 大阪音楽大学(声楽科)を卒業して、すぐにモスクワ音楽院に留学されたのですか？

天野；いえいえ。卒業したあと、専攻科(大学院)に行ったんです。ただ、父との約束で、「女の子は音楽で生きていくのは大変だから、結婚が決まったら専攻科は辞める」という条件で、行かせてもらった。そしたら、お見合いをしてすぐに結婚が決まってしまう、「もう、何もセンコウカ」という感じで(笑)、東京に来たのです。

—— では、ロシアに行かれたのは？

天野；夫の仕事(通産省)の関係で、本当にたまたまです。ウチは海外に行く機会が多くて、1 回目はエジプトで、私喜んでついて行った。何せ初恋がツタンカーメンだったものだから(笑)。それで、2 回目がソ連です。その時はもう娘がいたんですが、私も娘もチャイコフスキーが好きだったので「やったー、ロシアに行ける！」(笑)。

私、子供の頃、『白いトロイカ』(水野英子作)という漫画を読んで、それは帝政ロシア時代の貴族の娘を主人公にした漫画で、ストーリーも素敵だったし、当時の衣装や毛皮の帽子、宮殿などの描写もすばらしくて、それからずっとロシアに憧れていたんです。

—— いつ頃ですか？ ソ連というと 1980 年代ですか？

天野；1989 年です。ソ連時代の末期ですね。で、ロシア語も何もわからないまま行った。夫はロシア語を研修して行ったんですが、私は英語が少しは通じるかと思ったら、モスクワへ行ったら、通じないどころか英語の表示もない。娘は小さかったのですが、子供ってすぐ言葉を覚えますよね。それである時、娘が友達の誕生日会に呼ばれたんです。行く時はお迎えがあったのですが、帰りは近くまで迎えに行かなくていいけない。でも、地下鉄の乗り方もわからない。当時、オクチャブリスカヤに住んでたんですが、ドキドキしながら向

この駅に着いて…、帰りは娘に連れて帰ってもらいました(笑)。そんな状態ですよ。

—— モスクワへ行って、すぐに音楽院に入られたんですか？

天野; いや、すぐじゃないんですよ。音大を卒業して父の言う通りすぐ結婚したくないので、声楽家として名をあげたいとか、そういうことは全然考えてなかった。ただ、当時は声帯ポリープの手術をした後で、喉を切って歌えなかった間、私初めて歌が好きだっということに気がついた。もう一度ゼロから始めようと思って、歌の勉強を再開した矢先に行ったのがロシアだったんです。

ロシアで歌の先生を探したのですが、当時ソ連に駐在する外国人が秘書や家政婦、家庭教師などを雇う場合、すべてウブデカという人材斡旋機関を通さないとできなかった。で、ウブデカの紹介で来るのは音楽院を出たばかりの若い人だけで、いい先生が見つからなかった。そうしたら、モスクワに長く住んでいた人で、子供が同じ年齢で知り合った人が、紹介してくださったんです。

—— クラシックですよ。どんな歌を勉強したのですか？

天野; クラシックもそうですけど、私ロシアの古いロマンスがやりたかったんです。日本ではロシアの歌はみんなロシア民謡と言われますけれども、私フィンランドに行く列車の中で聞いたシャンソン風の曲がすごく好きで気に入って、それがロシアの古いロマンスだと聞いたので、ロマンスを教えてください先生を探したんです。で、紹介していただいたのが、シャリアピンが恋した女性で、元はペテルブルグの貴族のお嬢様。当時 90 歳を超えていらした。その方が本物のロマンスを教えられる最後の人だっというので、当時の日本大使館のすぐ近くにあった先生のお宅へ通って、教えてもらった。もちろんクラシックもチャイコフスキー、ラフマニノフ、グリンカすべて勉強しました。

私はロシア語が全然できなかったもので、ちょうどモスクワに来ていた早稲田大学の伊東一郎先生がまだ独身で歌大好きでいらしたから、「先生、レッスンに3カ月だけつき合って」「夕飯作ってあげるから」って(笑)、伊東先生にロシア語の読み方とか教えてもらいながら、週3回のレッスンに通ったのです。

—— モスクワ音楽院に入ったきっかけは？

天野; ちょうどその3ヶ月の間に、伊東先生の知り合いで有名なオペラ歌手ガリーナ・ピサレンコさん(モスクワ音楽院教授)のコンサートに呼ばれたんですね。12月24日クリスマスイブの日で、終演後ピサレンコ先生はお疲れなのに自宅に招いてくださった。それで、「天野さん、歌をなさってるの?」「今、こういう先生についてます」というような会話が…。私、モスクワ在住の主婦を対象に合唱を教えてたんですね。で、「先生、明日ウチの家でみんなでパーティーをするので、よかったらいらしてください」と言ったら、「わかった。じゃあ私の生徒も連れて行くわ」って、素晴らしい交流会になったんです。

その次にピサレンコ先生がコンサートに呼んでくださったのは3か月後で、最初の先生が亡くなったあとだった。「続けてる?」って聞かれたから、「実は、お亡くなりになったんです」って言ったら、「じゃあ、コンセルバトリー(モスクワ音楽院)にいらっしやいよ」。「え

っ、いいんですか?」「ええ、2回しか教えられないけど」「月2回も教えていただけるんですか?」「週2回よ。無料で教えてあげるから」。もう、「マジですか〜?」ですよ(笑)。



写真:ロシアでのコンサートの数々(提供、天野加代子さん)

下段は、2016年東日本大震災5年のメモリアルコンサートで、300人の合唱団と室内オーケストラと(モスクワ国立ドームミュージキ)

—— そこからロシアの音楽人脈が広がっていったんですね。

天野; ロシアというのは、表向きの話とは別に人間関係で決まるところがあって、何かちょっと気に入るとそういうことをやってくれるん

ですね。もうその頃には通訳なしでも歌のことは分かるようになっていて、ちゃんとピアニストをつけて週 2 回みっちり教えていただきました。

そしたらある日先生が、「2 か月後にあなたのリサイタルをラフマニノフ・ホールでやるから」。

モスクワ音楽院のラフマニノフ・ホールですよ。リサイタルですよ。嬉しいどころか怖くなって、先生を紹介して下さった方に「どうしよう？」って言ったならば、「ロシアではね、チャンスをもらったら絶対にとらなきゃダメ！」「死に物狂いでやりなさい！」「やる気ないと思われたら二度と声かゆらないよ」。

2 か月間、本当に死に物狂いで勉強しました。リサイタルで 20 曲歌うわけですよ。日本の歌も何曲か入れたけど、ほとんどがロシア語です。毎日、1 曲につき 20 回ずつ歌詞をノートに書いて…。家ではお客様の世話もしないといけないから、お客様が帰ったあと、夜中の 1 時から 4 時まで毎日やりました。

リサイタルが終わると、先生が知り合いのメディアの方に「日本人のオペラ歌手、加代子です。素晴らしいでしょう」って、紹介して下さった。私、日本的にね、「習い始めたばかりで、とてもじゃないけど歌手なんて…」とか言ったら、「あなた、そんなこと言うてどうするの！」「私があなたを教えたのは、あなたの体中から『勉強したい』って気持ちが漲ってきたからよ」「私は歌手です、声楽家ですと、恥ずかしくても何でもいっからはっきり言いなさい！」と叱ってくれ

て、あれで私の人生変わったんです。

その 2 か月後には、「クリンのチャイコフスキーの家で白夜祭があるから、あなた一緒に出ましょ！」。

もうどんどんチャンスをくださって、本当に、ガリーナ・ピサレンコ先生は、私の恩人です。



写真：ロシア文化への貢献が認められ大統領府にて勲章を受章

—— 1989 年から 91 年ソ連崩壊をはさんで、まだしばらくロシアにいらっやったんですね？

天野；そうなんです。夫の任期は 3 年で、92 年に帰国予定でした。私、日本に帰るたくなくて、モノはなくて不自由だったけど、ロシアがもう大好きで。先生に「実は帰ることになって…」と言ったら、「あなたは今まで主婦業と学生と両方頑張ったんだから、研究科を受けなさい」。それで研究科を受けたら合格したんですよ。夫には事後報告で(笑)、「受かったんだけど」と言ったら、「これまでやることやってくれたから、時間をプレゼントしよう」と言ってくれましてね。

ただ、「娘がダメって言ったら、その時はあきらめてくれ」。そしたら娘は、私が夜中に必死に勉強しているのを見てたから、「チャンスじゃん」(笑)。

ということで、夫と娘だけ先に帰して、一人モスクワに残ることになったんです。で、1 年後に、モスクワ国立音楽協会とコントラクトを結んで専属リストになった。当時はもうソ連崩壊後ですが、1 年間に 68 回もコンサートをさせていただきました。ロシア人の歌手よりもたくさんロシア国内を回っている感じです。

—— そのあと日本に帰って来られてからは、音楽活動ですか？

天野；いや、帰ってきて、日本で音楽をやるのがどんなにお金がかかるか思い知りました。オーケストラとやるとなると、要するに歌手がオーケストラの費用を持たないといけない。チケットを 100 枚単位で売るか、自分で買い取るかということなんです。家族の支援や応援してくださる人がいないととてもやっていけない。

ロシアだと、ギャラだけでなく、ホテル代や交通費まで払ってもらえる。自分で飛行機代を払って行っても日本でやるよりはいいですよ。

ソ連時代には、優秀なディレクターがプログラムを組んで、ホール代もオーケストラも国が全部お金を出してコンサートがやれた。良き時代ですね。でもね、ソ連崩壊後 4~5 年するともうみんな大変でした。国の予算がなくなって、自分たちで集客しなければいけないというのでオーケストラが随分潰れた。それも全部見てきました。

—— モスクワ・クアルテットを日本に招聘した経緯は？

天野；モスクワ・クアルテットのアレクサンドル・ツィガンコフさん(ドムラ奏者、ロシア人民芸術家)とは、モスクワに住んでいたドイツ人の友達を介して知り合いました。もう、すごい人間国宝で、ゴステレラジオやアンドレーエフ・オーケストラなどいろんなオーケストラに紹介して下さった。そこからまたいろんな人につながって、共演したロシア人歌手の紹介で日本の北川つとむバラライカアンサンブルとも知り合いました。北川つとむさんに会いに行ったら、すごく気に入って下さって、すぐにツィガンコフさんを日本に呼んで、一緒にコンサートをやらせていただきました。

ツィガンコフ夫妻とはもう 30 年近く家族ぐるみのおつきあいです。最初は、親戚の演奏家とアンサンブルを作ってもらって、そのあとヴァレリー・ザジーギンさん(バラライカ奏者、ロシア人民芸術家)夫妻とモスクワ・クアルテットを組まれたんですけど、「加代子、一緒にやろうよ」と言って、モスクワだけでなく、キエフとかスウェーデン公演とか、いろいろ連れて行っていただいた。本当に私足向けて寝れないですよ。どっちの方角か分からないですけど(笑)。

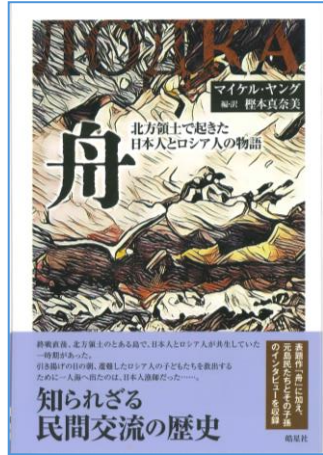
それで、少しでも恩返ししたいと思って、「天野加代子とロシアの素晴らしい仲間たち」と銘打って、モスクワ・クアルテットやロシアの演奏家の皆さんを招待してコンサートを始めたのです。始めたのは 2011 年で、今年 13 回目です。私の人生を変えてくれたロシアの素晴らしさをたくさんの人に知っていただきたいと思って音楽活動を続けています。

(聞き手：伏田昌義／2024 年 5 月 9 日)

本の紹介

舟 北方領土で起きた日本人とロシア人の物語

マイケル・ヤング 著
 榎本真奈美 編・訳
 皓星社
 四六判 320 頁
 定価 2530 円 (税込)



本誌 228 号 (24 年 1 月) で先行紹介したが、戦後「日ロ混住時代」の志発島 (歯舞群島) で起きた実話をもとに書かれた小説「舟～北方領土で起きた日本人とロシア人の物語」が 7 月に出版された。

当時のロシア人島民の証言をもとに、箱舟に乗って海に流された 4 人のロシア人の子どもたちを、強制送還される直前の日本人漁師が島に留まって救出したエピソードがノンフィクションタッチで描かれている。

著者はロシア人映画プロデューサー。映画化を目指して脚本を書き上げたが、ウクライナ戦争など緊迫化した政治情勢が続く中で映画製作のメドが立たず、まずは小説の形でこの話を知らせようと思立ったという。翻訳に当たった榎本さんは、箱舟に乗って助けられた子どもの一人がウラジオストク近郊の町で存命中であることを調べ、そのインタビューをして救出時の様子や日ロ混住時代の生活を聞き取り、収録している。「敵国同士のような状況でも人間は信頼関係を築けることが描かれており、今のような時代だからこそ多くの人に読んでほしい」と話している。

「ロシアとは何ものか～過去が貫く現在」

池田 嘉郎 著
 中央公論新社 2200 円 (税込)

2 年前にウクライナ戦争が始まって以来、多くの人が「ロシアとは何ものか」という疑問を抱いただろう。この疑問にロシア史の全体像を見直すことで答えようとするのが本書のねらいである。

「ロシアについて考え、ロシアと対峙するためには、過去が現在へと貫通する、独特な社会のあり方に目を凝らさなければならない。過去 100 年ほどのあいだに、ロシアは帝政から共産党独裁へ、そして大統領制国家へと変転をとげた。だ

が、ロシア史を貫く基本構造は同じである。それは、統治が直接的な人間関係によって支えられているということである。政治家や官僚の個人的な属性の上位にあつて、彼らの行動を縛る規範が、ロシアにはないのである」(「はじめに」より)と著者は述べる。

西欧諸国では 18 世紀初頭から王位継承法が成立して、君主の地位や継承順を規定したのに対して、ロシアでは皇帝はそうした法には縛られなかった。近代以降の西欧では非人格的な法による支配が確立していったため、法が権力者の上位にある。ロシアではそうではない。皇帝も書記長も大統領も、権力者は個人として力を振るっている。法が統治者の上に立つのではなく、統治者が法の上に立つ秩序が、「法治」の名のもとに正当化されている。かくしてウクライナ侵攻も法の上に立つ権力者プーチン大統領の意思が決定的だったことが指摘される。

現在のプーチン・ロシアと密接に結びつく近現代の帝政ロシア・ソ連の歴史を再考する手引書として、とくに 2 章「ヨーロッパとロシアの 20 世紀」、5 章「実現したユートピアの歴史」、第 9 章「ソヴィエト帝国論の新しい地平」、第 13 章「ソ連を崩壊させた革命家ゴルバチョフ」などの論考が大変参考になる。

「2022 年のモスクワで反戦を訴える」

マリナ・オフシャンニコワ 著
 武隈喜一・片岡静 訳
 講談社 1980 円 (税込)

ロシア第一チャンネルのニュース番組「ブレイミヤ」に突如乱入し、「NO WAR」と大書した紙を掲げてウクライナ戦争反対を訴えた同テレビ編集者オフシャンニコワ。わずか 6 秒間のその映像は、全世界を駆け巡り大きなニュースとなった。プーチン政権の強圧下で多くの独立系メディアが活動休止や閉鎖に追い込まれ、テレビがほとんど官製プロパガンダになってしまったロシアで、それでもジャーナリストの良心が生きていることを、彼女の行動は示した。

しかし、その勇気ある行動は大きな代償を伴った。警察官による聴取、SNS 投稿を口実とした行政裁判と有罪判決を経て、職を失い、FSB (連邦保安庁) による監視が始まった。けれども、ロシア当局はまだこの時点では、彼女のような反対派をどう扱うべきか決めかねていたように見受けられる。この隙について、彼女はドイツ新聞「ヴェルト」と契約し、モルドバ経由でウクライナに潜入し戦争取材を試みるが、ウクライナジャーナリストによる激しいバッシング(「FSB のスパイ」という罵詈雑言)を受けてロシアにもどる。ロシアでもウクライナでも受け入れられない現実、プロパガンダに引き裂かれた家族(夫、息子、母親)との衝突、二度目の裁

判(ロシア軍に関する虚偽の情報を流布した罪での有罪判決)、自宅軟禁から娘との国外逃亡(フランスへの亡命)まで、22年3月~9月の6か月間の彼女の行動の軌跡と、彼女をその行動に駆り立てた幼い時の第一次チェチェン戦争の体験が手記に綴られている。

それにしても、「プーチンが権力に就いて以来、37人のロシアのジャーナリストが殺害され、19人のジャーナリストが今なお獄中にあり、約200のメディアが外国のスパイと指定され、7つのメディアが<好ましくない団体>とされ、1万のサイトが閉鎖され」た(本書エピローグ)という事実には慄然とする。

本書には、クレムリンや地方政府からメディアに対してどのような指示が出されて、プロパガンダが演出されているのかが具体的に記されている。オフシャンニコワが、「御用メディア」の中で長年働き、そのプロパガンダに手を貸す形でジャーナリストとしてのキャリアを重ねてきたことは事実だが、しかし、3月14日(「ブレーミヤ」への乱入の日)以来、さまざまな葛藤を抱えつつ、激流に流されるように緊迫した日々を過ごした記録は、現在のプーチン体制がどのようなものであるか著者ととも体感する格好の材料を提供している。

(F)

~~~~~

## ロシア極東連邦大学函館校が 来年度から新規学生募集を停止

残念なニュースです。1994年以来30年間にわたってロシア語専門教育を行ってきたロシア極東連邦大学函館校が、入学生数の急減により2025年4月から新規募集を停止することになりました。学校は現在の在校生(14人)が卒業するまで教育活動を継続しますが、長年日本のロシア語教育に貢献してきた函館校があと数年で無くなるのは、本当に残念なことです。創設から今日まで尽力してこられた教員・関係者の皆様に心から「ご苦労様」の言葉を送ります。

函館校では、困難な中で最後まで在校生の教育を継続するために、寄付金を募っています。ご協力いただける個人・団体は是非、ご支援ください。よろしくお祈りします。

### 《募金要綱》

- ・金額：個人=1口5千円より/団体・法人=1口2万円より
- ・振込先：北海道銀行函館支店 普通 1438560  
みちのく銀行函館営業部 普通 5133441  
(名義)学校法人函館国際学園

※ 寄付金には税制上の優遇措置が講じられます。寄付される際は必ず、金額と氏名、連絡先を函館校にご連絡ください。

## ◆◆編集後記◆◆

▼諸般の事情により発行が1週間遅れました。お詫びいたします。▼本号には、たくさんの方から寄稿していただきました。モスクワ、タシュケントでの留学記、大阪大学ロシア語サークルの活動など、若い人たちの頑張りを知るのには嬉しいことです。そのほか、日ロ交流情報もたくさん集まりました。▼ウクライナ戦争はまだ終わりません。制裁措置も続くでしょう。今の状態が今後もかなり長く続くことを前提として、これからの活動を組み立てる必要があります。大阪日ロ協会・藤本和貴夫理事長の4月ウラジオストク訪問報告によれば、ロシア側も日本側も人的交流のパイプを維持するために、動き出したことわかります。私たちも、臆さず、慌てず、しっかりと日ロ交流の再開へむけて歩を進めたいと思います。(F)

## \* \* JICのロシア語留学・研修 \* \*

### 35年間の実績だから、JICのロシア語留学

JICロシア語留学研修は、JIC国際親善交流センターが日本で最初に旧ソ連・ロシアの諸大学と直接契約により開始した私費留学システムです。この35年間でJICがロシアに送り出した留学生は長期・短期合わせて4,500名以上にのびます。

### 安心の現地アフターケア

留学中はできる限り自分のことは自分でやっていただくのが語学力上達の道です。しかし、一人ではどうしても解決できない大学との交渉ことや、緊急事態の際の連絡対応など、留学中の皆様をバックアップするために、JICでは各受入機関と緊密な連絡体制を整えています。

## ロシア語長期留学4月生・募集中



オンライン  
相談 受付中!

期間：2025年4月1日より10ヶ月

締切：2024年12月14日

- モスクワ国立大学 984,000円(授業料10ヶ月) 予価
- サンクト・ペテルブルグ国立大学 1,039,000円(授業料10ヶ月) 予価
- ゲルツェン教育大学 908,000円(授業料10ヶ月) 予価
- ウラジオストク極東連邦大学 430,000円(授業料10ヶ月) 予価
- シンスク国立言語大学 422,000円(授業料10ヶ月) 予価

※上記の金額以外に別途、寮費、手配料、渡航費用、ビザ代金および取得手数料などががかかります。

ロシア以外の国でのロシア語留学の手配も可能です!  
(中央アジア、バルト諸国など)

### ◆JICロシア留学デスク◆

電話またはメールでご連絡ください。

東京事務所 平日9:30-16:30 03-3355-7294

※留学相談はオンラインで行っております(要事前予約)